

大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業
(イノベーション対話促進プログラム)
実施状況報告書

平成 26 年 4 月 10 日

国立大学法人横浜国立大学

目 次

1 当初計画の概要	3
(1) 当初設定した事業の目的・計画の概要	3
(2) 実施体制	3
2 業務の実施状況	4
(1) 事業全体の概要	4
(2) 実施したワークショップの詳細	6
① 左近山アイデアソン WS	6
② 横浜市部局横断 WS	8
③ 未来ビジョン対話 WS	11
④ 若手によるアイデア出し WS	15
⑤ 国際シンポジウムによる対話実験	20
⑥ まとめ対話 WS	26
3 事業実施により得られた知見・課題等	28
(1) 本事業による一連の取組を通じて得られた対話ツールの効果・課題等	28
(2) アイデア創出の筋道と課題	29
(3) 対話手法の改善と実践—今後のアクション—	30

SUMMARY

本事業は、現代の都市における住環境の問題を中心的なテーマとして取り上げ、産・官・学・地域を巻き込んだ幅広い参加者による対話を試みた。その際、議論のプロセスを可視化・オープン化を実現するために、a. 社会とのコミュニケーション・ツールとしての〈ブックレット〉の構築、b. 〈開かれた空間〉の活用、c. 多層・複雑系の議論の可視化を狙った議論の〈模型化〉を通じた対話手法を用い、その対話ツールとしての有効性を検証するとともに、都市をめぐる革新的なアイデアの創出を狙い、さらにその知見を COI 拠点での研究・社会実装活動に展開することを企図した。

本事業のワークショップ、シンポジウムでは、対話ツールについて一定の有効性が検証されると同時に、今後改善すべきさまざまな課題も明らかになっている。アイデア創出の面では、〈Creative Neighborhoods〉や〈ソーシャルミックス〉、〈イノベーションの規模感〉など、都市の住環境をめぐる〈実践的イノベーション〉に向けた重要なキーワードを獲得・共有するとともに、その実現に向けた具体的な課題を浮き彫りにした。さらに、ワークショップの企画・運営に関しては、適切な主体が対話に参加するだけでなく、その運営そのものにかかわることで、より実践志向の高いイノベーションの枠組みが創出されることが示唆された。

1. 当初計画の概要

(1) 当初設定した事業の目的・計画の概要

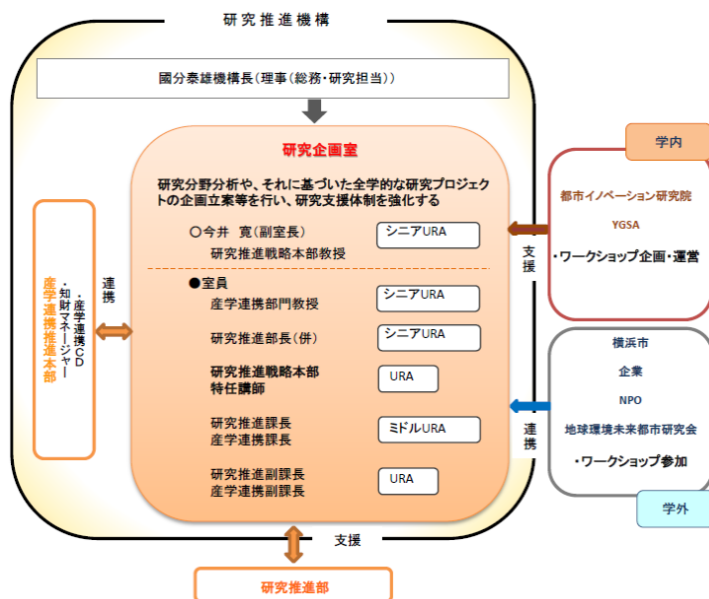
本事業では COI ビジョン 3「活気ある持続可能な社会の構築」を実現するため、都市の〈あるべき未来像〉を描き出すことを目的としたワークショップを企画することとした。そのために、a. 「人が生きる持続力ある高度都市システムの実現(=誰もが輝くことのできる開かれた都市)」、b. バックキャスティング型(演繹) + シナリオ型(帰納) 思考の対話型ワークショップ、c. オープンプロセスとスタジオ型空間という3つのテーマを掲げている。

誰もが輝く活気ある高度な都市システムを実現するためには、多様な人々の意見やニーズを都市という複雑系の中でつきあわせ、未来像へとつなげる必要がある。〈あるべき未来像〉を構築し、技術や研究にバックキャスティングするアプローチと、都市・社会に潜在する問題を抽出し、それを効果的に解決することを目指すシナリオ型のアプローチを衝突させ、アウフヘーベンさせることによるイノベーション創出を狙っている。

対話手法として、専門分野以外の人々も議論に巻き込み、自由な発想や活発なコラボレーションを生む具体的な実践手法を採用することとした。すなわち、産・官・学・地域を巻き込んだ幅広い参加者による議論のプロセスを可視化・オープン化を実現するための a. 社会とのコミュニケーション・ツールとしての〈ブックレット〉の構築、b. 〈開かれた空間〉の活用、c. 多層・複雑系の議論の可視化を狙った議論の〈モデル化〉を通じた対話手法である。本事業ではこうした手法の検証を進めるとともに都市をめぐる革新的なアイデアの創出を狙い、さらにその知見を COI 拠点に展開することを企図した。

(2) 実施体制

本事業は、國分泰雄研究推進機構長(本事業責任者)のもと、研究企画室 URA(今井寛副室長、大坪幸夫研究推進副課長、齊藤孝祐特任教員等)、産学官連携推進部門(村富洋一教授、西川幹二 CD 等)を中心に運営し、研究推進部が研究・産学官連携につき事務的に支援することとした。

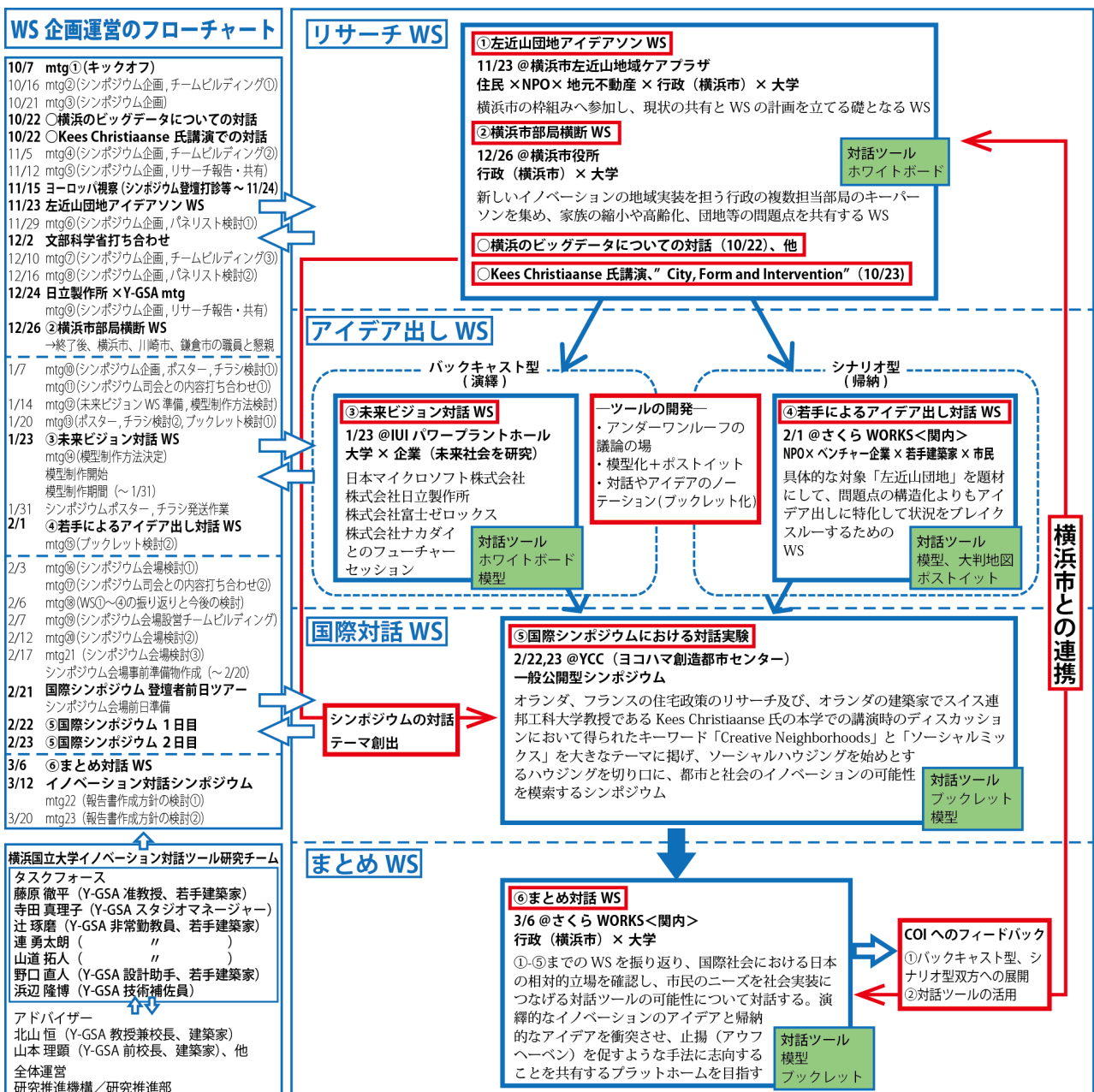


これに加えて本事業のワークショップの運用は、国内外の対話型ワークショップや国際シンポジウムの実績、世界的な都市デザイン・参加型社会に関する知見を蓄積している本学都市イノベーション研究院、及び Y-GSA (Yokohama Graduate School of Architectures) の教員や事務員が企画・支援することとした。また、対話型ワークショップの場として IUI パワープラントホール、YCC を使用することとした。

2. 業務の実施状況

(1) 事業全体の概要

本研究課題では、「活気ある持続可能な社会の構築」の実現を目指すイノベーション対話を、<ブックレット>、<開かれた空間>、<模型化>という独自の対話ツールを用いて行った。その際、現場レベルで実践に取り組む実務家を研究チームに組み込み、本事業の進め方やワークショップ（WS と略記）の運営、リサーチ、対話ツールの作成・使用方法などについて具体的に検討を進めた。同時に、最終的な地域実装に持ち込むために、以前より大学が包括連携協定を締結している横浜市と情報共有、意見交換を行うことで、地元への還元を狙っている。ファシリテーターには、建築家として実際の現場で行政や市民と共に活動している北山恒教授や藤原徹平准教授を据え、大きく4つのフェーズに分けて進行した（下図参照）。



a. リサーチ WS (①、②)

実際の市民、行政が抱えている問題点と建築家の知見を突き合わせることを目的とした。最終的には「Creative Neighborhoods」「ソーシャルミックス」という2つの大きなテーマが導かれた。

b. アイデア出し WS (③、④)

未来社会研究を通じた現実的な解決策の創出を試みる企業と大学が、共同でバックキャスト型の対話を行った。同時に30代以下で、未来社会を担う若者を集め、現状を打破するアイデアを出し続けることを狙うシナリオ型の対話を行った。ここで提起されたアイデアは蓄積・ツール化され、その後のWSに反映されている。

c. 国際対話 WS (⑤) ※右写真上から2番目 (撮影=ゆかい)

国内外の都市で実践に携わる専門家を招聘し、日本の現状を相対的に再検討した。これまでの対話で顕在化した日本の問題やアイデアに関するブックレット、及び都市の状況を示す模型を用い、〈あるべき未来像〉を想起させる議論を行った。

d. まとめ WS (⑥)

全てのWSを通じての総括を横浜市で行った。実際の市民のニーズと企業や行政のビジョンをもとに、イノベーション型の未来を導くための具体的な社会実装について横浜市と対話している。



※〈ブックレットについて〉と〈模型化〉

本事業では対話ツールとして、〈ブックレット〉と〈模型化〉を採用した。議論の模型化プロセスは、専門性を越えた対話や自由な発想を生む土台となる。また、ブックレットの作成・簡易出版により、議論で生まれた新しいアイデアや概念を可視化し、対話の前提を共有するだけでなく、その結果を社会発信することにもつながる。

※ワークショップの開催場所〈開かれた空間〉について

また、〈開かれた空間〉としての特色を備えた三会場を利用した。IUI パワープラントホールは本学旧ボイラー室をリノベーションしたものであり、スタジオを隣接させることで学生も参加しやすい空間となっている。YCC (ヨコハマ創造都市センター) は、1920年代の第一銀行横浜支店をリノベーションしたものであり、横浜の歴史を知るに相応しい市民に開かれた公共空間であると同時に、文化、研究活動の発信拠点となっている。さくらWORKSはNPO法人横浜コミュニティデザインラボが運営する対話空間であり、市民の創造活動のハブとして機能している。

※学内外への情報発信について

一般公開WSについて、ポスターやDM等を研究推進機構とY-GSAが保有する連絡網を駆使して配布したほか、FacebookやTwitterを用いて情報を広く周知した。シンポジウムでは、終了後もTwitter上で活発なやり取りが続いた。

(2) 実施したワークショップ (WS) の詳細

①左近山アイデアソン WS (スタートアップ) 2013年11月23日(土)

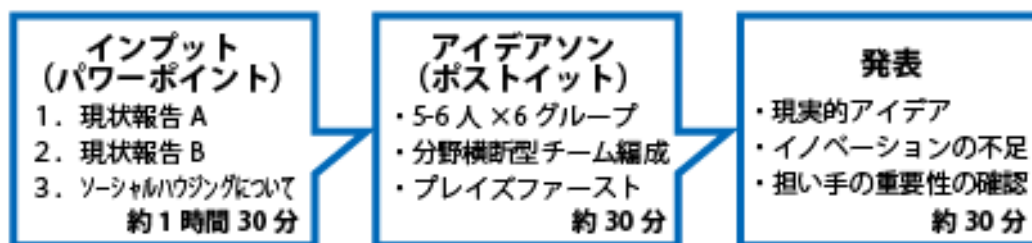
*本WSは横浜市主催のものであり、本事業が検証を行う立場にはないが、その後の問題設定にかかわる重要な出発点となっているため、ここでは概要のみ記載する。

○概要

本WSは、イノベーション対話ツール研究チームが行った「活気ある持続可能な社会の構築」に向けた調査の結果、高齢化、過疎化などの問題が加速度的に進む団地 (ソーシャルハウジング) が重要なテーマであると判断し、行政 (横浜市) が後援したワークショップの枠組みにオブザーバー参加したものである。

本WSのテーマは、具体的な対象である横浜市旭区「左近山団地」の現状を多角的に把握し、それらをブレイクスルーするためのアイデア出しを、NPO法人、行政 (横浜市)、学部が違う複数の大学といったバックグラウンドを持つ参加者が、偏り無く少人数のグループに分かれアイデアを出し合うことで、未来の郊外団地像について考えることであった。

○対話の手法・使用したツール



はじめに左近山団地やソーシャルハウジングの情報をインプットし、その後「人口減少と高齢化が進む郊外団地をどのように再生するか」をテーマに少人数 (5-6人) ×6グループでアイデアの出し合い (アイデアソン) を実施した。

○スケジュール

- 15:00-15:30 インプット①左近山団地の現状報告 A
- 15:30-16:00 インプット②左近山団地の現状報告 B
- 16:00-16:15 インプット③ソーシャルハウジング (団地) をめぐる状況
- 16:30-17:00 アイデアソンワークショップ
- 17:00-17:30 成果報告

○ワークショップの会場風景

左近山地域ケアプラザにおける
グループディスカッション
(Facebook より)



○ファシリテーター・参加者

[司会] 関口昌幸（横浜市政策局政策部政策課担当係長）

[参加者]

地元住民、地元不動産会社「株式会社リスト」

内海宏（都市プランナー、地域計画研究所）、綾部正規（左近山ケアプラザ所長）

藤原徹平（建築家、フジワラテッペイアーキテツラボ主宰、横浜国立大学 Y-GSA 准教授）

山道拓人（建築家、東京工業大学博士課程ツバメアーキテツ共同主宰、横浜国立大学 Y-GSA 非常勤教員）

辻琢磨（建築家、403architecture [dajiba] 共同主宰、横浜国立大学 Y-GSA 非常勤教員）

	所属機関・部署等	19歳以下		20歳～39歳		40歳～59歳		60歳～		不明		合計	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
a	大学等	自然科学系研究者			1	1						2	0
b		人文・社会系研究者										0	0
c		技術系職員										0	0
d		事務系職員										0	0
e		リサーチ・アドミニストレーター (URA)										0	0
f		産学官連携コーディネーター										0	0
g		学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)		1		2	2					3	2
h		上記a～g以外				4						4	0
i		不明										0	0
j	企業	研究開発部門									0	0	
k		事業企画部門									0	0	
l		経営部門									0	0	
m		上記j～l以外										0	0
n		不明				1	1	1				2	1
o	TL0										0	0	
p	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)			3	1						3	1	
q	公設試験研究機関										0	0	
r	財団法人・第3セクター等					2	2	4			6	2	
s	そのほか (a～rのいずれにも該当しないような場合)							6	2		6	2	
	合計	1	0	11	4	4	2	10	2	0	0	26	8

○新たな知見・課題

実際に現地でWSを行うことで、高いリアリティを持ったアイデアが提案された一方、現状の問題解決以上の豊かさを提示するアイデアは少なかった。実施されるアイデア自体よりも、そのアイデアを恒常的に考え、支え続けることのできる主体の形成が非常に重要だという知見が導き出された。また、WSにおける情報のインプットを全体に対してプレゼンテーションするのではなく、別々のバックグラウンドをもった参加者同士のグループ内で行うことで、より多くの時間をアイデアソンに費やすことができ、提案の質を高めることができる可能性を発見した。

○今後のWS運営方針

本WSでは、アイデアを出す際の前提となる問題意識が参加者各々、行政（横浜市）と参加者との間でズレていたことにより、様々なアイデアが生まれた一方、問題解決以上の豊かさを提示するアイデアが少なくなってしまうことが課題として挙げられる。この点に鑑みて、実践主体のひとつである行政が抱える問題意識を共有するためのワークショップ（②横浜市部局横断WS）を開催し、以降の②～⑥のWSへとアイデア創出への筋道を描くこととなった。

②横浜市部局横断 WS 2013 年 12 月 26 日(木)

ア. ワークショップの概要

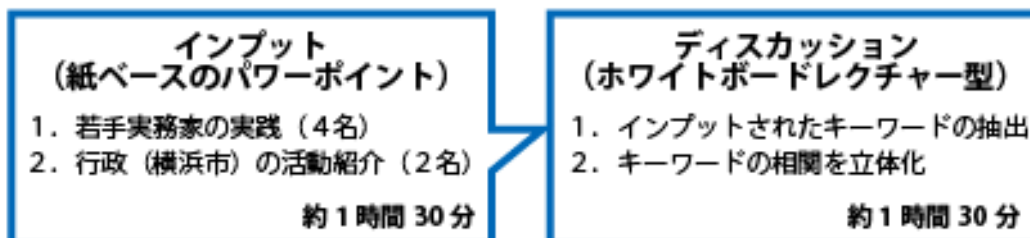
本WSは、行政の問題意識が地元・地域の住民や学術的知見と必ずしも一致しない事実が判明したWS①を受け、実践主体の一つである行政（横浜市）が抱えている問題意識を大学と共有するために実施したものである。

はじめに、現場レベルで実践に取り組む若手実務家から木造密集市街地、震災、地方都市などをテーマに多様な問題提起が行われ、農業、福祉、住環境といった分野を横断する具体的なアイデア出し対話が行われた。郊外団地に対する提案や新しいソーシャルビジネスプラン、大学との連携の方法等が議論され、今後の実践に向けた体制についての議論も行われた。

ここでは、若手実務家である建築家(山道拓人、辻琢磨、野口直人、連勇太郎)の実践、大学の研究機構、行政の現状認識が、相互に影響し合うことで知的刺激を生み、イノベーティブなアイデアを創出することが期待された。特に、若手実務家から団地を中心とした問題提起を行うことで、WSにおけるイノベーションのためのきっかけを作り出そうと試みた。

若手実務家からの問題提起は、被災地復興支援活動における居場所の作り方、南米での貧困地区でのソーシャルハウジングの取り組み、首都圏の木造密集市街地の問題、地方都市での継続的なまちづくり、といった、具体的でシリアスな課題が提示された。それに対して、普段から社会の現実を支える行政サイドとして、このような問題をどのように解決できるかについて対話がなされた。

○対話の手法・使用したツール



若手建築家の実践から導かれた問題提起を簡単なパワーポイント(A4用紙3-5枚)によって行った。ファシリテーターによって即興で立体化されたホワイトボードを随時確認しながら、キーワードベースでディスカッションを行った。

○スケジュール

- 15:00-15:30 自己紹介・概要説明
- 15:30-16:15 若手建築家による問題提起
辻琢磨、山道拓人、野口直人、連勇太郎
- 16:15-17:00 行政（横浜市）の方々の活動紹介
田並静、小田嶋鉄朗
- 17:00-18:00 問題の共有と解決策提案のための議論

○ファシリテーター

藤原徹平

○参加者

官学連携を前提にして、大学側から実務とアカデミックな領域を横断するプロフェッサーアーキテクトが、行政側からは政策と現場に精通した政策局、都市デザイン室、区の職員が参加した。両者をつなぐ存在として、同じく大学側から若手実務家である建築家が参加し、彼らの問題提起をきっかけにして、大学、行政に何が可能でどのように連携していけるのかが議論された。

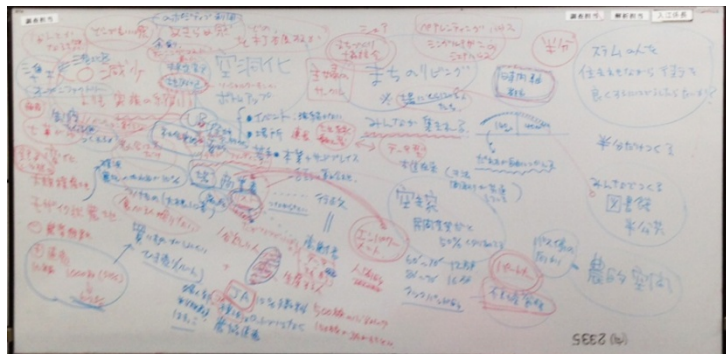
関口昌幸、田並静(保土ヶ谷区役所まちづくり調整担当係長)

	所属機関・部署等	19歳以下		20歳～39歳		40歳～59歳		60歳～		不明		合計			
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
a	大学等	自然科学系研究者												0	0
b		人文・社会系研究者												0	0
c		技術系職員												0	1
d		事務系職員												0	0
e		リサーチ・アドミニストレーター (URA)												1	0
f		産学官連携コーディネーター												0	0
g		学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)												0	0
h		上記a～g以外												4	0
i		不明												0	0
j	企業	研究開発部門												0	0
k		事業企画部門												0	0
l		経営部門												0	0
m		上記j～l以外												0	0
n		不明												0	0
o	TLO												0	0	
p	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)												4	1	
q	公設試験研究機関												0	0	
r	財団法人・第3セクター等												0	0	
s	そのほか (a～rのいずれにも該当しないような場合)												0	0	
合計		0	0	7	1	2	1	0	0	0	0	9	2		

小田嶋鉄朗(横浜市都市デザイン室担当係長)、桂有生(都市デザイン室都市デザイナー)
 寺田真理子(横浜国立大学 Y-GSA スタジオマネージャー)、山道拓人、辻琢磨(以上、建築家、横浜国立大学、前出) 連勇太郎(建築家、慶応義塾大学博士課程、NPO 法人モクチン企画代表理事、横浜国立大学大学院非常勤教員)
 野口直人(建築家、野口直人建築設計事務所主宰、横浜国立大学 Y-GSA 設計助手)

○ファシリテーションの効果・課題

まず若手実務家からの問題提起をファシリテーターがホワイトボードにまとめ、ディスカッションの中で派生した共通の問題意識をグルーピングし、議論を構築した。現状の問題意識の追認を行うことができたが、発展した議論への移行が難しかった点が課題として挙げられた。また、ホワイトボードを利用し、問題と議論を即興的にまとめる能力はファシリテーターによって個人差があるため、使い方がある程度フォーマット化する必要がある。



○ワークショップの会場風景

横浜市役所（政策局）における
ディスカッションの様子



イ. 検証

本 WS では、若手実務家の実践、大学の研究機構、行政の現状認識が、相互に影響し合うことで知的刺激を生み、イノベータイブなアイデアを創出するまでに至らなかったが、問題意識の共有という目的は達成された。次回以降は実際の模型を用いることで、イメージを具体的に捉え、異なるバックグラウンドを持つ参加者同士のコミュニケーションを図ると同時に議論の深化を狙うこととした。

○新たな知見・課題

郊外団地の高齢化、過疎化、少子化が進む現状に対して、アイデアの独自性そのもの以上に、そのアイデアを恒常的に考え、支えられる主体の形成が非常に重要だという結論を得た。

ウ. ワークショップのアウトプット

○産学官連携活動に向けて

実務とアカデミックな領域を横断するプロフェッサーアーキテクトによるファシリテーションの下、若手実務家からの問題提起をきっかけにして行政サイドの適確な知見と現場経験によって、社会福祉や居住環境、農業といった分野横断型かつ実現可能性の高いアイデアが多く提案された。具体的なアイデアとして、建築設計事務所のサテライト、滞在型研究が団地に適していることなどが提案された。また、これからの産学官の取り組みとして、新しい感覚で環境、福祉、まちづくりを実践しながら、ソーシャルビジネス的に動かねばならないこと、場と商品、場を扱う産業がキーになるとの意見が共有された。さらに、その場で議論をホワイトボードに随時書き出し、まとめていくことによって、「越境リーダー」、「市民の困っていない感」といったキーワードベースの議論が展開され、異なるバックグラウンドを持つ主体同士の対話を引き締めた。

○次回 WS へのフィードバック

本 WS で得られた問題を元に、以降の WS③～⑥を展開した。具体的な問題点はブックレットとしてまとめられ、国際対話 WS やまとめ WS において議論の前提を共有する有効なツールとして機能した。また、検証で得られた「担い手」の重要性を勘案し、次回の③未来ビジョン対話 WS は、実践主体の一つである企業が描くビジョンを共有することで、バックキャスト型の未来像実現に向けたイノベーション対話を行うこととした。同時に④若手によるアイデア出し WS では、実践主体の一つである若い担い手（40 歳以下）に現状を共有させた上で、どのようにブレイクスルーを起こし、イノベーションを生むかを検討するシナリオ型の対話を行うこととした。

③未来ビジョン対話 WS 2014年1月23日(木)

ア. ワークショップの概要

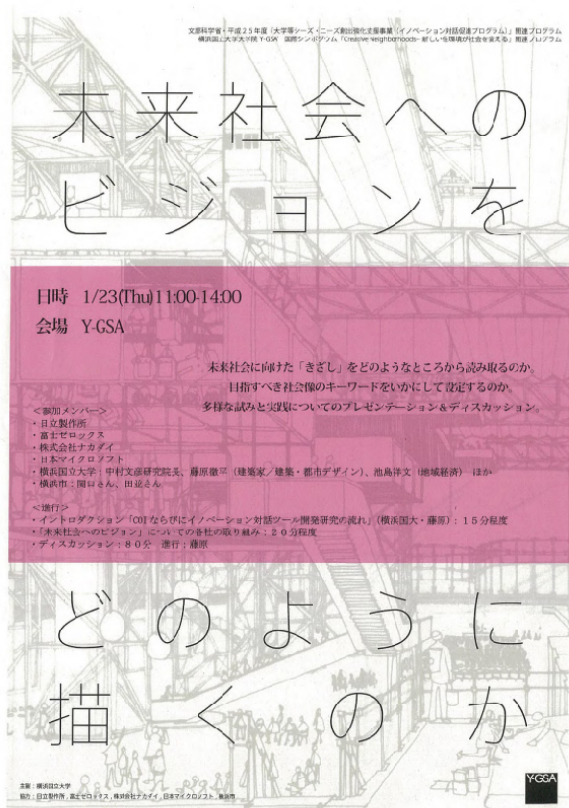
本WSは実践主体の一つである企業との間で、①左近山団地アイデアソンWS、②横浜市部局横断WSを通じて見えた課題や現状の問題意識を共有し、描いた未来社会のビジョンを技術や研究にバックキャストイングしていくことを目指す対話を実施した。未来をテーマに先鋭的な取り組みを進める多様な企業のキーパーソンを招聘し、イノベーションの契機を生むことを狙った。

はじめに参加企業の取り組みのプレゼンテーションによるインプットが行われた。株式会社日立製作所の峯元氏は、都市交通、エネルギーを含めたイノベーションを目指し、PEST視点での変化分析によるきざし手法を用いてつくば市と協働で未来志向型勉強会から25のきざしを考案した自社デザイン本部の事例を紹介した。

株式会社富士ゼロックスの津田氏は、低炭素社会となるべき2020年に向け、自社ライフサイクル全体のCO2を30%削減に加え、2020年に700万トン(日本の0.7%)削減を目指す取り組みを紹介した。

日本マイクロソフト株式会社の田島氏は、世界規模で人口が都市に集中しつつあり、「都市はイノベーションを通じて雇用を生み出す人のエネルギーの発電所」という言葉を紹介した。スマホ、クラウド、ビッグデータの普及に伴う新しい都市サービス(スマートシティ)のあり方の研究としてバルセロナ市、ロンドン市/マンチェスター市、横浜市の事例を紹介した。

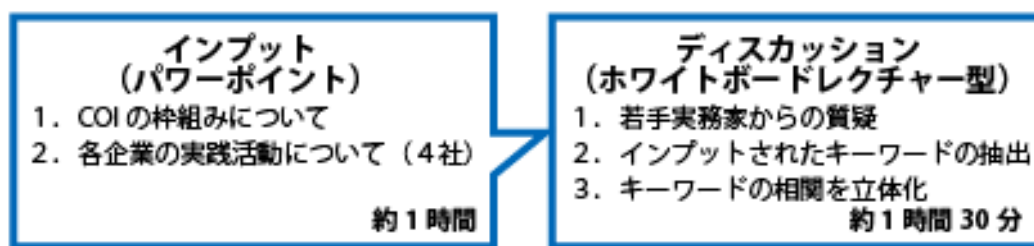
群馬県に本拠地を置く株式会社ナカダイの中台氏からは、「“使い方”を創造し、“捨てる”をデザインする-リマーケティングビジネス-」と題して、徹底的な分別による廃棄物処理ビジネスを拡大した自社の歴史を紹介した。これは、リマーケティングビジネス、リユース、リサイクルの発展系といえる。また、自社が運営するモノファクトリーでのマテリアルライブラリーの展開、



廃棄物処分場を公開、解体ワークショップといった廃棄物処理業における新しい試みも併せて紹介された。

これらを踏まえ、「未来ビジョンの描き方」をテーマとして、ディスカッションを通じた具体的なアイデアの積み上げが、教育、福祉、住環境などの分野を横断して行われた。その中で、ナカダイの取り組みのように、既存のリソースを丁寧にリサーチし、編集し、ストーリーとして語る想像力が求められているということも共有された。一方で、教育の視点からも議論があり、高齢者でデジタルに強い人が高齢者に教えるプログラムが生まれたように、地域の中での学び+企業+学校+高齢者といった仕組みづくりも新しい価値をつくるために必要であるという一つの未来ビジョンが、この場において描かれた。また、実際に大学と企業がどのように連携する枠組みを作ることができるかといった今後に向けた議論も行われた。

○対話の手法・使用したツール



本WSの対話は、参加企業のプレゼンテーション→ホワイトボードを利用したグループディスカッションの形式で行われた。まず参加企業の取り組みが未来ビジョンというテーマに沿って発表され、その後、若手実務家からの質疑を挟んでディスカッションを開始した。それぞれのプレゼンテーションは、ファシリテーターによってホワイトボードに即興的にまとめられ、ホワイトボードに書かれたキーワードをその都度確認することで、議論の立体化を図った。

○スケジュール

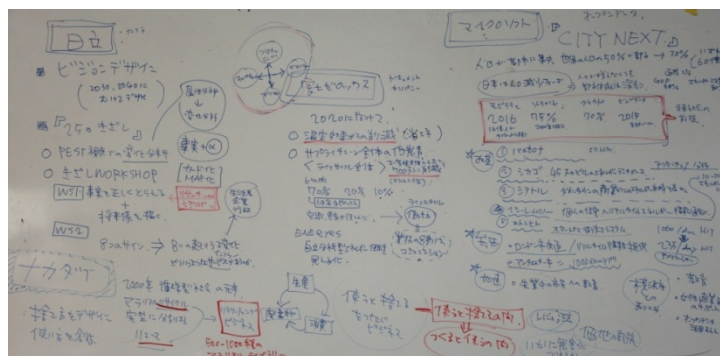
- 11:00-12:00 参加企業による
プレゼンテーション
- 12:00-12:20 質疑
- 12:20-13:30 議論

○ファシリテーター

藤原徹平（横浜国大、前出）

○参加者

- 日本マイクロソフト株式会社 田島定尚
- 株式会社日立製作所 峯元長
- 株式会社富士ゼロックス 津田大介、他2名
- 株式会社ナカダイ 中台澄之、他2名
- 関口昌幸（横浜市、前出）、田並静（保土ヶ谷区、前出）
- 今井寛（横浜国立大学研究推進機構研究企画室副室長、シニア URA）



使用されたホワイトボードには
キーワードが抽出されている

中村文彦（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院研究院長）

池島祥文（横浜国立大学大学院国際社会科学研究院准教授）

山道拓人、辻琢磨、連勇太郎、野口直人（以上、建築家、前出）、浜辺隆博

	所属機関・部署等	19歳以下		20歳～39歳		40歳～59歳		60歳～		不明		合計	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
a	大学等	自然科学系研究者			1							1	0
b		人文・社会系研究者			1							1	0
c		技術系職員			1		1					1	1
d		事務系職員										0	0
e		リサーチ・アドミニストレーター（URA）			1							1	0
f		産学官連携コーディネーター										0	0
g		学生（大学院博士課程、修士課程、学部生）										0	0
h		上記a～g以外			5							5	0
i		不明										0	0
j	企業	研究開発部門									0	0	
k		事業企画部門									0	0	
l		経営部門			2	1					1	2	
m		上記j～l以外			1						1	0	
n		不明			1	3					3	1	
o	TLO										0	0	
p	地方公共団体（公設試験研究機関を除く）			1	1						1	1	
q	公設試験研究機関										0	0	
r	財団法人・第3セクター等										0	0	
s	そのほか（a～rのいずれにも該当しないような場合）										0	0	
	合計		0	0	10	4	5	1	0	0	15	5	

○ファシリテーションの効果・課題

前回の②横浜市部局横断 WS 同様、ファシリテーターは藤原徹平准教授が務めている。各企業からの情報を書き出すだけでホワイトボード1面分に及び、続くディスカッションでも同じ分量を必要とした。ここで出てきたアイデアはファシリテーターによって立体的に視覚化された。各企業のビジョンは各社の持つ技術的な裏づけのもとに描かれたものであり、実現性はきわめて高い一方、実際の現場レベルで障害が多いという事実も共有できた。

ここで提起されたキーワードは若手実務家からの問題提起を挟み、さらなるディスカッションのきっかけとなっている。対話手法枠組みである演繹・帰納の観点からその一部を下記に示す。

- ・日本マイクロソフト株式会社/世界規模でのマクロな実践/演繹
- ・株式会社富士ゼロックス/地球温暖化に対するCO2削減の取り組み/演繹
- ・株式会社日立製作所/新しい価値観をボトムアップで導き出す取り組み/帰納
- ・株式会社ナカダイ/新しい廃棄物処理の枠組みをリソースの再編集/帰納

ディスカッションを通じて、参加企業の規模だけでなく演繹的/帰納的側面という観点から多様なアイデアが整理され、未来ビジョンの断片を共有することにつながっている。また、前回②横浜市部局横断 WS 同様、ホワイトボードに即興的に問題提起と議論をまとめる作業はファシリテーターの個人差があり非常に難しいため、使い方がある程度フォーマット化する必要はある。



○ワークショップの会場

IUI パワープラントホールでの議論

イ. 検証

本 WS では、革新的なアイデアを創出するまでには至らなかったものの、各企業の実践的・先鋭的な取り組みが、若手実務家の実践、大学の研究機構、行政（横浜市）と相互に影響し合う場を設けることができた。未来をテーマとする多様な企業のキーパーソンが集まり、多様な主体間でキーワードが共有されたことで、今後のイノベーション創出に向けたプラットフォームが形成され、それが今後の活動の基礎となることが期待される。また、会場中央に「活気ある未来社会の構築」を目指して作成された模型（「地域社会圏」山本理顕）を設置し、異なるバックグラウンドを持つ参加者との具体的な議論を呼び起こすツールとして有効であることを確認した。

○新たな知見・課題

分野の違うそれぞれの企業との取り組みを「未来」というキーワードによってつなぎ、相互に對話したことで、新しい価値の実感が見える指標（≒定量化）が重要だという知見が導かれた。また、単に未来を描き出すというよりも、株式会社ナカダイのような既存の資源に対して深い洞察を与え、それらを編集し、物語を与えることによって、新しい価値に共有可能性を与える帰納的なビジョンの作り方の重要性も同時に共有された。他方、参加者の人数に対して会場が広すぎたために、マイクを回している時間で議論が間延びしてしまった点は課題として挙げられる。また、企業の利害関係が絡むため、議論の十分な深化が図れなかった点も課題である。

ウ. アウトプット

○産学官連携活動に向けて

今後の企業との連携に際した具体的なアイデアとして、地域の中での学び+企業+学校+高齢者といった仕組みづくりが挙げられた。新しい価値をつくるために、実施の可能性に向け、議論を継続的にすすめていく予定である。

○次回 WS へのフィードバック

本 WS において課題として挙げられた参加者数と会場の広さのミスマッチを解消するために、次回③若手によるアイデア出し WS は、横浜のベンチャー企業によるシェアオフィス<さくらWORKS>を会場として、Facebook や Twitter など広く市民の参加を呼びかけ開催することとした。また、ホワイトボードによる WS 形式がファシリテーターへの依存を生み、議論の客観性を確保できない可能性が指摘されたため、新しい刺激をもたらす意味でも外部の NPO 法人「アイデア創発コミュニティ推進機構」の力を借りることとした。

④若手によるアイデア出し対話WS 2014年2月1日(土)

ア. ワークショップの概要

本WSは、①左近山団地アイデアソンWS、②横浜市部局横断WSによって浮き彫りにされた課題や現状の問題意識を共有し、これからの社会の担い手である30代以下の若い層を中心に、「われわれはどんな団地だったら住みたいか」というテーマで実施した。参加者の経験や知識をもとに、団地がどのように変わればよいのかを想像し、自分たち自身が住みたくなるような団地のアイデアを生み出すことを目的とした。

○対話の手法・使用したツール

若手実務家の実践から導かれた問題提起を簡単なパワーポイントによって行った。その次に、NPO「アイデア創発コミュニティ推進機構」によるアイデアソンを実施し、アイデアスケッチや、アイデアのハイライトを通じて、アイデアレビューを行った。最後に、グループを作り、得票の多かったアイデアの実現について、実際の左近山団地の模型を使いながらディスカッションを行った。

今回は、アイデア提案の具体的な対象である左近山団地の模型を2種類用意した。ひとつは周辺環境や地形がわかる広範囲のもの、もうひとつはスケールを拡大して実際に覗き込みながら生活空間のイメージが湧くような大きなサイズのものである。

○アイデアソンの具体的な流れ

(資料提供：アイデアプラント、NPO 法人アイデア創発コミュニティ推進機構)

・「プレイズファースト」

相手の意見に対してネガティブなことを言うのではなく、よい点を見つけ、そこから話やアイデアを発展させていくという対話の姿勢である。基本的な前提として、プレイズファーストが徹底されることがワークショップのプロセスにおいて求められる。



左近山団地

・「スピードストーミング（ペアブレスト）」

短時間の間に、複数の人たちでたくさんのアイデアを生み出すための手法である。特に日本人は会議のような場面において自らの意見表明を控える傾向にあると言われる。ペアブレストはこうした初期状態を乗り越えるためのきっかけとして有効なものである。ペアブレストでは二人一組になり、決められた時間内にお互いにアイデアを共有し、意見を交換する。所定の時間がきたら相手を替え同様の対話を繰り返す。その際、前の人との会話で出たアイデアも自分自身のアイデアとして発表してよい。相手を替えながら少しずつアイデアを展開させ、様々な意見をフィードバックすることで最初は単一のアイデアだったものも複数化・多角化し、短時間の間にたくさんのアイデアを生み出すことが可能となる。

・「アイデアスケッチ」

企画書やプレゼンテーションを作成するのではなく、スケッチをするように思いついたアイデアを太めの濃いペンを使って紙に書く。些細なアイデアでも書くことが重要であり、この段階で、自分自身でそのアイデアのよしあしを判断する必要はない。

・「アイデアのハイライト」

アイデアスケッチで作成したシートを机に全て並べ、他の人のアイデアを見て回りながら案を共有する。良いと思うアイデアや気に入ったアイデアに付箋を貼ったり、ペンで印を付けたりして投票し、よい案を浮き上がらせていく。

・「アイデアレビュー」

アイデアのハイライトで投票された上位のアイデアを参加者全員の前で発表し、案の内容を共有する。ここでもプレイズファーストの姿勢が重要であり、アイデアを改善していくために参加者で案そのものをエンカレッジしていく姿勢が求められる。

このワークショップでは、スピードストーミング、アイデアスケッチ、アイデアのハイライト、アイデアレビューの順番でワークショップを進めていき、アイデアレビューの段階で左近山団地の模型なども使い案の内容を共有した。

○スケジュール

10:00-11:15 第一部

インプット1：「DIYからDIWOへ」 水野大二郎（慶應義塾大学専任講師）

インプット2：左近山団地の現状 藤原徹平（横浜国立大学准教授）

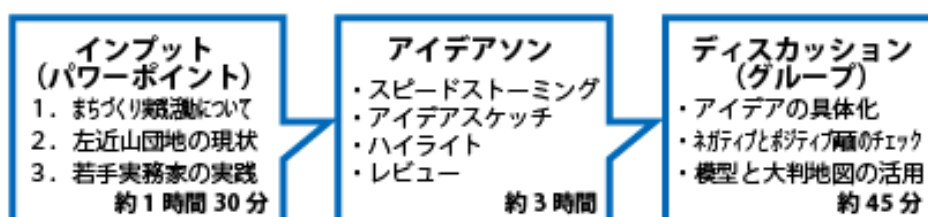
インプット3：若手建築家によるソーシャルアーキテクチャーの実践

辻琢磨（403architecture[dajiba]）、山道拓人（ツバメアーキテツ）、

野口直人（横浜国立大学設計助手）、連勇太郎（モクチン企画）

12:00-15:00 第二部 アイデアソン テーマ：「わいわれはどんな団地だったら住みたいか」

15:00-16:15 第三部 グループディスカッション



○ファシリテーター

NPO 法人アイデア創発コミュニティ推進機構（石井力重、矢吹博和、宮島真希子）

○参加者 約 40 名

仕事や専門性に関しては多様な人たちが集まるように Facebook や Twitter など広く一般募集し、結果的には、建築、IT 関係者、編集者、大学生などバックグラウンドの異なる参加者を集めることができた。

	所属機関・部署等	19歳以下		20歳～39歳		40歳～59歳		60歳～		不明		合計	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
a	自然科学系研究者											0	0
b	人文・社会系研究者											0	0
c	技術系職員											1	1
d	事務系職員			1			1					0	0
e	大学等 リサーチ・アドミニストレーター (URA)			1								1	0
f	産学官連携コーディネーター											0	0
g	学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)											0	0
h	上記a～g以外			6								6	0
i	不明											0	0
j	企業 研究開発部門											0	0
k	事業企画部門											0	0
l	経営部門											0	0
m	上記j～l以外											0	0
n	不明											0	0
o	TL0											0	0
p	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)											0	0
q	公設試験研究機関											0	0
r	財団法人・第3セクター等			11	15			1				12	15
s	そのほか (a～rのいずれにも該当しないような場合)											0	0
	合計	0	0	19	15	0	1	1	0	0	0	20	16

上記参加者他、NPO 職員、IT 関係者、建築不動産関係者、大学生
寺田真理子、齊藤孝祐、浜辺隆博（以上、横浜国立大学、前出）等

○ファシリテーションの効果・課題

本ワークショップは、アイデアを集団で効率よく生み出す研究やその普及活動を行っている NPO 法人のアイデア創発コミュニティ推進機構に協力を要請して実施した。石井力重のファシリテーションを中心に会を進行し、プレイズファーストの精神を大切に様々な案が短時間の間で幾つも見出された。

一方で、事前にファシリテーターと話し合う時間が限られていたため、ディスカッションの中で模型という特殊なツールについての使い方を明確化する機会に乏しかった点は課題として残った。模型をほかの手法と組み合わせる際の方法論を検討する必要がある。



○ワークショップの会場

さくら WORKS（関内）におけるアイデアソンの様子



イ. 検証

本WSでは、様々なバックグラウンドを持つ人が参加したことにより、多様なアイデアが生み出された。案の内容もすぐに実施可能なものから、本格的に計画し戦略的なアプローチが必要になる手の込んだものまで様々なレベルのものがつくられた。こうしたアイデアの多様化・多層化は、スケールの異なる2つの模型や大判の地図を見ることで、身近に存在する団地のイメージを自分自身の実感として「住みたい団地」へと変換できたことに起因すると考えられる。実際に団地に住んでいる当事者をターゲットにせず、全く関係ない若い層が中心となってアイデア出しをしたため、今まであまり考えられてこなかった団地の可能性や潜在的な魅力が数多く確認された。

○新たな知見・課題

今回のワークショップでは、アイデアそのものを深く掘り下げるところまでは実施しなかったが、演繹型の企業が中心となった③未来ビジョン対話WSと合わせて、今後の団地再生あるいは「集まって住む」ことのヒントを得る充実した対話の場となった。

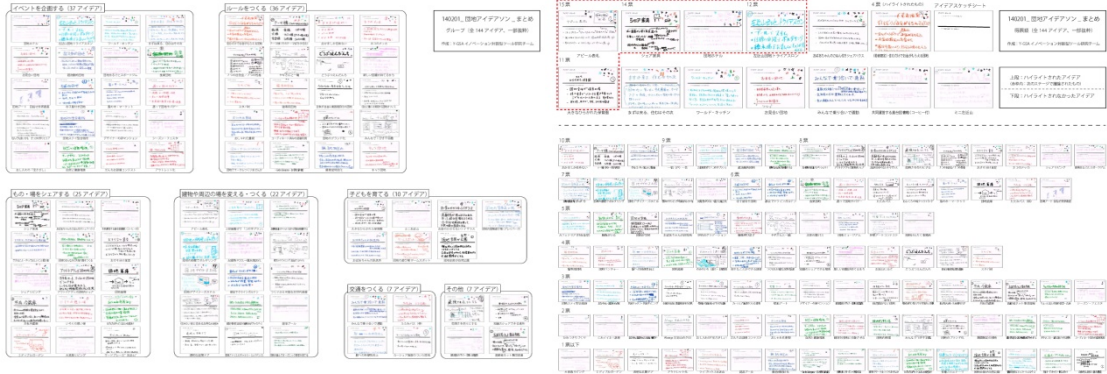
ウ. アウトプット

○産学官連携活動に向けて

郊外団地に住んでみたいと考えるようになった若者が何人も生まれたことは、担い手の創出という点で第一歩となったのではないかと考えられる。

○次回 WS へのフィードバック

今回の WS において創発されたアイデアが行政レベルで実現可能なか議論するための資料として下のものを作成した。これを元に「活気ある持続可能な社会の構築」を目指したイノベーション対話を次回以降進めていく。まとめ対話 WS においては、これらすべてのアイデアが、自治会レベルで実現可能であり、やはり担い手が重要であるといった議論が喚起された。



アイデアをグループ化したもの

アイデアを得票順にまとめたもの